

山岳ぐんま



会長就任のご挨拶

群馬県山岳連盟会長 吉田直人

登山界の重鎮である八木原前会長の後任としてこの度、群馬県山岳連盟会長に就任致しました境町山の会所所属の吉田直人です。

先ずはその大役に身が引き締まる思いです。皆さんのお力添えを頂き新しい群馬県山岳連盟を創っていきたくと考えておりますので何卒よろしくお願い致します。

さて、今後について私なりの思いを少しお話ししたいと思います。昨年より進めておりました法人化と名称変更は、コロナ禍の影響を受け頓挫してしまい延期を余儀なくされましたが、来年の総会には議案として改めて提出し総会を通過させることで、名実ともに新しい群馬県山岳連盟をスタートさせたいと考えます。その頃までにはコロナ騒動も沈静化しているといいのですが。

中長期的には二〇二八年本県で開催される群馬国体に向けて選手育成のサポートを強化します。具体的には県スポーツ協会が旗

振り役で進めている「ぐんまスーパーキッズプロジェクト」のスポーツクライミングの子供たちが、八年後はちょうど群馬国体の世代となります。ポテンシャルの高いこの子たちが地元開催の大きな舞台で輝けるよう、そして上位に食い込めるよう、しっかりと支援していくことが必要です。それには我々もつとスポーツクライミングを理解することも大切だと思います。このスポーツは岩登りから派生したものであり、近年あちこちにクライミングジムが開設され、今や若い男女を中心に街なかで楽しめるアーバンスポーツに進化し身近な遊び?にもなり、登る楽しさを知った多くの人達に支持され、オリンピック競技にも採用されるなど、世界的にも時代の大きなうねりとなっていることは言うまでもありません。未来を託す群馬のクライマー達の練習に顔を出したり、大会には応援に行ったりと、時間があったら是非足を運んで頂ければ有難いと思います。

二〇一六年、県内の主要山岳三団体で群馬県山岳団体連絡協議会を立上げました。似たような悩みを抱える群馬県勤労者山岳連盟並びに日本山岳会群馬支部と一緒に、群馬の山屋として協力し合い、この四年余りで本県の山域をエリア別に登山ルートの難易度をわかり易く示した「群馬県の山のグレーディング」作成や、群馬の山旅として県で売り出し中の全長一〇〇キロにも及ぶ「ぐんま県境稜線トレイル」を、初期段階から開通に向け登山道の調査、検討に加わり、現在もルート上の危険箇所や道標水場の確認など維持管理を実施しております。また、上毛新聞社から昨年十二月出版された「群馬の山ベストガイド」の取材、調査もほぼ計画どおりに終えることができました。これらの事業はひとつの団体では時間や労力に限界がありますが、三団体で力を合わせることで大きな成果が得られることが分かりました。これからも他の二団体をリスペクトし、このいい

協力関係を継続させ群馬県山岳団体連絡協議会として更に発展させたいと考えます。

最後になりますが、昨今の登山はスマートフォン普及で便利なアプリが次々と登場し、多くの登山者がその恩恵を受けていますが、自分の足を使って安全に登りそして安全に下る、という行為は変わっていません。世の中目まぐるしく変化している中、これまで培ってきた群馬県山岳連盟の良き伝統を受け継ぐとともに、時代の変化に対応できる組織づくりに微力ではございますが精進していく所存でございます。

「稜々として山そびえ／川清れつの水ながる／われら群馬に生うけて／この山川に恥じざらん」

郷土の自然と人について、その山岳重疊・気骨稜々といったさまを、白樺派の詩人・高橋元吉はこう謳った。「山岳ぐんま」一頁のロゴは、若くしてダウラギリI峰に逝った星野龍史君の作品である。

令和二年度 群馬岳連総会報告

新型コロナウイルスの感染拡大を阻止するため、政府並びに群馬県が広範囲にわたる休業要請や外出自粛を求める状況の下、令和二年度群馬県山岳連盟総会は令和二年五月、書面形式での開催を余儀なくされたこととなった。総会準備に充てられた四月理事会において、令和元年度事業報告並びに決算報告が承認された後、八木原明会長から辞意表明があり、小泉俊夫副会長、藤沼隆男幹事の退任の意向も報告された。これを受けて新しい役員体制について三役で協議が進められ、会長に副会長の吉田直人氏、副会長に小林達也氏(重任)と佐藤光由氏(理事長と兼任)、幹事に田島等氏(重任)

と荒木輝夫氏(新任)が推挙され、常任理事の協議を経て、五月文書理事会で承認を受けた。また、理事長に佐藤光由氏、副理事長に高橋守男氏(ともに重任)が就任することも承認された。

総会は、メールによらず書類にて、令和元年度の事業報告(第一号議案)と決算報告(第二号議案)、更に令和二年度役員改選(第三号議案)が、すべての理事及び評議員に送付され、提案された。各議案についての回答は、記名式で保護シール付きハガキの返信で執り行われた。その結果、理事・評議員八十三名のうち六十九名の回答が得られ、集計されて全議案が可決承認された。



小林達也
副会長



佐藤光由
副会長兼理事長



高橋守男
副理事長



小池寛喜
事務局長



群馬県山岳連盟顧問

八木原 啓 明

退任ごあいさつ

羽野前会長の後を受け二〇二二(平成二十四)年五月から四期八年間群馬県山岳連盟会長を務めさせて頂きました。

自分では三期六年位はやらせて頂くかと思っていました。二〇一五年五月に日本山岳協会の会長に就任し、本年二〇二〇年夏に東京オリンピック開催と言う事になりました。後の公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSPA)の会長もオリンピック直前に会長を辞めさせるわけにもゆきまい、と言う事で任期が来年二〇二一年六月まで、三年六年間務めることになりました。

ならば、岳連も長くはなるけれども今年の役員改選では「オリンピックが終わるまで、もう一期やらせて下さい」と皆さんにお願いするつもりでした。そして、来年の五月か六月の総会で岳連会長としては任期半分ではあるが、JMSPA会長退任と同時期に退任しようとも考えておりました。

ところが世界中を震撼させる「新型コロナウイルス」なるものが蔓延し、オリンピックが一年延びることになりました。となりまして、もう一期続ける必然性と言いますか、必要も理由も無くなります。オリンピックが私に引導を渡してくれたと言う事でしょう。

これは天の配剤とも言えますが、神か仏かは知りませんが、私に会長を辞める良いタイミングを教えてください、与えてくれたと思えました。いくら「時代は大きく変わる、動いている」と会員や役員の皆さんに申し上げても自分自身に変える力、対応力が無かった訳ですから。

本年度から群馬岳連も法人化し、名前も変わる予定でした。「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という言葉もあります。今が引き時と決心しました。

同じ人間が長く「会長」などの立場にいと、組織は全てとは言わないまでも、概して停滞し、澱

みます。独裁者でなくともです。政治であろうがスポーツ競技団体だろうと同じです。「長期政権は悪だ、弊害が生まれる」みたいな事を他の組織に向かってはそんな論評、批判も散々して参りましたが、実は私自身がその落とし穴にはまり、元凶になりそうだと言う事を忘れそうになっていたと言う事です。

そんな例をたくさん見て来ました。皆さんも知っている、見ていると思えます。時々話題にもなりました。人心一新、組織体制を一新して停滞気味の群馬岳連を、登山界を立て直して下さい。群馬岳連内に隠れた人材、逸材は必ずいるはず。発掘し才能を発揮する機会を逸材に預けて活躍してもらって欲しいと思います。

本総会は「書面による総会」ですので少し長くなりますが自身の岳連との関わりを振り返りながら私の遺言といたしたい

と思います。

一九六九(昭和四十四)年十月理事会で遭難対策部が発足し、「岳連遭難救助隊」が結成されます。十月十九日に第一回救助訓練が一ノ倉沢コップ状岩壁で行われ、その訓練に参加したのがほぼ最初でありました。弱冠二十二歳。隊長は沼田の西山年秋、副隊長は群馬登高会の田中成幸さんでした。

松井高重郎さん(七二年春ダウ

ラギリIV峰で死去)、阿久沢廣さん(七八年秋ダウラギリI峰で死去)と私がコップのハンダ上まで攀り、三人で打ち込んだポルトにワイヤーを固定し、遭難者収容訓練をした。この頃は群馬県中に、日本中に腕自慢、足自慢、力自慢の山屋、クライマーがひしめき、競い合っていた。松井田山岳会の齋藤長作さんも現役代表でした。

この年、一九六九年は三月に群馬ミヤマ山岳会が群馬岳連初の海外登山で台湾の玉山へ。十月には一ノ倉沢の衝立岩に「ミヤマルト」が開拓されました。六月に海外登山研究会の前身のヒマラヤ研究会が小暮勝義、矢内敏夫、阿久沢廣さんらで結成され、暮れには枠を広げた研究会集会が高崎で開かれる。

私はその後理事、常任理事に就任する。海外登山研究会委員長はダウラギリI峰で小暮勝義さんが亡くなったために翌一九七九年から十三〜四年間務めて前橋山岳会の名塚秀二と交代し、理事長は田中成幸さんの後を八年間務めさせて頂き、これまた名塚と交代しました。岳連との関わりが五十年間を超え、役員として四十一年間です。

ご指導いただいた会長は浜名一雄さん(一九六五〜一九八四)、星野光さん(一九八四〜二〇〇八)、羽野順一さん(二〇〇八〜二〇一二)の三代でした。理事長は赤石春親さん(一九六四〜一九七三)、石井謙一郎さん(一九七三〜一九八四)、田中成幸さん(一九八四〜一九九四)のやはり三代でした。

私自身は七一年春のダウラギリIV峰の偵察以来、失敗を繰り返しながらもヒマラヤ登山だけを目標に続けることになりました。救助隊員も七五年秋のカモシカ同人のダウラギリIV峰隊参加のために一九七三年にはミヤマの宮崎勉と一緒に辞めました。カモシカ同人、日本ヒマラヤ協会など県外組織の登山隊にもいく

つか参加しましたが、それは全て「群馬のため、群馬岳連のため」という思いでした。七一年、七二年春のダウラギリIV峰(7661m)、七八年秋のダウラギリI峰(8167m)、南東稜初、八四〜八五年、八七〜八八年冬のアンナプルナI峰南壁(8091m)初、一九九一〜九二年、九三〜九四年冬のサガルマータ(エベレスト、8848m)、南西壁初の七回が群馬岳連隊でした。これが私の最後の大ヒマラヤ登山でした。引退後は名塚に託しました。「群馬岳連は三つの世界初の記録」を達成しました。

あかぎ国体は一九八三年秋でした。国体に協力しない奴は「非国民だ」と言われかねない雰囲気です。宮崎勉、沼田の山田昇、独峰の鈴木繁はカモシカ同人の一九八三年秋のロツェ(8511m)、八三〜八四年冬のエベレスト(8848m)登山隊に参加することになる。

私は八二年秋のダウラギリI峰ペアルートで雪崩事故を起こし、右足ひざの靭帯を痛めてヒマラヤ登山どころではありませんでした。不自由な足で国体のコース整備で生活費を稼ぎ、川場村での登攀競

技の副主任審判を引き受けて国体にも関わることで、海外登山研究会への風当たりを弱めようなどと殊勝にも考えていました。

群馬のヒマラヤ登山では三回の遭難事故で七人を亡くしました。唯一人、全てに関わった者として慙愧に耐えられません。死ぬまで忘れませんが、一九八九(平成元)年三月の山田昇、三枝照雄、小松幸三のマッキンリー遭難は群馬隊ではありませんでしたが青天の霹靂衝撃でした。

三月六日早朝六時前に入ったヒマラヤ観光開発の田中祥治からの「山田隊下山せず」の第一報から四月十一日に遺体となって帰国するまでの悪夢のような、嵐のような一か月余りの日々も書き残さねばなりません。一報後八木原の家に宮崎、名塚が集まり田中と善後策を話し合う。明日にも現地へ連絡員を派遣したいが宮崎しか決まらぬ。佐藤光由は行けるという。名塚は待機させる。

その日のうちに小松幸三が社長をしていた東京のマウンテントラベル社に集合したのは群馬岳連からのミヤマの宮崎、佐藤、八木原他日本ヒマラヤ協会、カモシカ同人、GHMJ、法政大二部山岳部

OB会、同人バイネ・ニ・アソブ、第二次RCC関係者が集まり、「マッキンリー遭難対策本部」を設置し、八木原が本部長に就く。

翌七日には家族会議を終えた宮崎と佐藤はアンカレジに飛ぶ。本格的搜索・救助隊派遣、増強、と目まぐるしい毎日が始まるが、太田の鈴木茂と名塚秀二ら最終的には総員十九名、宮崎隊長、尾形好雄副隊長らによる遺体収容隊となり活動がなされた。

最初は「支援金はご遠慮します」としたが大きなマスコミ報道は「搜索・救助費用に」とカンパ送り先の問い合わせなどの有難い申し出が殺到する。結局は群馬県内を中心に全国から二千人近い個人と数十の団体から総額三千万円を超す支援金とお金以外の七十数件の差し入れが届けられた。

翌一九九〇(平成二二年)九月三十日から始まった「山田昇杯登山競争大会」は名前を変えながらも昨年までに延べ二十八回のトレイルランニング大会が続けられたが、本年二〇二〇(令和二二年)秋の大会は「新型コロナウイルス」の世界的な感染拡大のために残念ながら中止を決める。国民の祝日「山の日」が二〇一

* 8月11日は「山の日」です

六(平成二十八年)年から施行されたが、制定への分かり易い動きの始まりは二つあるように思う。二〇〇二(平成十四)年の国連提唱の「国際山岳年」を機に国際山岳連盟(U I A A)が世界中に制定を呼びかけ、日本でも制定への兆しが生まれるも、一時期下火になったもののわずかな日本山岳会員を中心にあきらめなかった人たちの思いがあったことが大きいであろう。

岳連、労山、日本山岳会(J A C)などの組織に入っている人はその1%にも満たない現実があり、会員数減少や高齢化は山岳会活動を圧迫して来た。時代の変化にともない、登山界も急激な変化に直面している。それらに対応するには一つの登山組織だけでは困難である。

そんな中で前述の「山の日」も始まる。楽しい登山、安全登山のために登山道の難易度と登山者の体力度を分かり易くグレーディング化する事業、群馬県が整備する「県境稜線トレイル」など登山界として取り組むべき課題は山積していた。

協会の前身の全日本山岳連盟が呼応して開催された「夏の立山大集会」という登山教室の閉会式で、山岳人の心を結集して山を愛し、安全登山を目指した『山の日』を制定しよう、全国の山岳家に呼びかけようと満場一致で決議していた(一九六一年七月二十七日付読売社会面)が時間の経過と共に消えてしまったという事実もある。

私自身が谷川岳の山開きや谷川岳の日などを労山と協力しながらやっているのを見ていた佐藤岳連理事長が「そんなことなら、協議会を作ってやればいいのでは?」と言う。登山界は一つにならなければ、と言いつつ続いていた私自身が足元から固める、始めることを忘れていたのです。

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」日である。「群馬県山岳団体連絡協議会」の設立は、日本には一千万人前後の登山愛好者がいると言われるが、

二〇一六(平成二十八)年四月十四日設立総会を開く。「岳連会長が協議会長に就任する」という規約にしたため、八木原が会長、労山岳連会長の清水隆次さんと

A C群馬支部長の田中壯佑さんが副会長となる。

おかげで前述の「山の日」や「谷川岳の日」、「グレーディング」やこれから述べる「ガイドブック」、「県境稜線トレイル」整備への協力、群馬県庁での「山フェスタ」など登山関連の行事などの活動を連携するようになり、登山界の沈み込みを防ぐ以上に拡大への力となっていると確信している。

全国ではこれらの三団体がそれなりに連合して一緒に活動をしている県があるにはあるが、協議会まで組織したのはいまだに群馬のみである。事あるたびにあちこちで組織化を推奨してはいるのですが後続はまだありません。

協議会として上毛新聞社の息の長いベストセラー登山ガイドブック「群馬の山歩き130選」の改訂版を二年間かけて「群馬の山歩きベストガイド 安心して登れる126コース」として出版した。

登山や登山者の変容は登山コースをも変えて行く。楽なコースは登山者が集中して荒れる。長かったり、難しいコースは嫌われて登山者が近づくかなくなり廃道同然となる。いずれにしても荒れてくる。グレーディングのこともあり、

コースを点検し、見直して難易度を付ける作業と共に紹介し直す。群馬の山を自分の体力に合わせて安全、安心に楽しく登って欲しいと思う。

「県境稜線トレイル」。何の用事だったか忘れてしまったが岳連役員数人で県の観光物産課を訪問した。課長以下会議中で不在。改めて出直します、と退室しようとしたところへ課長らが戻る。課長から「ちょうど良いところに来てくれた」とばかりに「実は・・・」と今日の会議で県の三、四課が関わる案件で知事から下命があったという。

谷川連峰から新潟県、長野県との県境稜線を志賀高原、四阿山を超え嬭恋村の「鳥居峠」までの一〇〇キロメートルを超す縦走登山道、ロングトレイルを整備することになったので群馬岳連も協力して欲しいと言う。

我々山岳連盟や登山関係者が「否」を言えるはずがない、というよりは願ってもない有難い話であった。これこそ登山界として協力すべき話であった。山小屋は谷川連峰上にあるだけであったが、三国、四万エリアの「ムジナ平」に十一人収容のかまぼこ型の避難

小屋が昨年秋に完成した。県の依頼で全コースの点検も七月から十月まで協議会が受け持ち区間を毎月実施している。

群馬県を中心に本年八月にオリピックとパラリンピックの間に開催する予定であったインターハイもコロナ禍で中止になってしまいました。登山競技は上州武尊山と尾瀬のヤマメ平を舞台に実施予定でした。

インターハイを目標に厳しいトレーニングにも耐え、頑張ってきた高校生の皆さんにとっても、長い準備に携わってこられた高体連登山専門部の皆さんにとっても残念過ぎる結末になってしまい、私どもでは何ともしようもないにしても可哀そうで、申し訳ない思いで一杯です。男女ともに地元大会での優勝の可能性が大きかっただけにコロナが恨めしい。

国体山岳競技が二〇〇八(平成二十)年第六十三回大分国体からスポーツクライミングだけになり、群馬にとつて二度目の国体が二〇二八(令和十)年に巡ってきます。ご苦労をおかけしますが宜しくお願い致します。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

令和2年度 群馬県山岳連盟役員名簿 (2020年6月10日現在)

会 長	吉田直人 (境)
副 会 長	小林達也 (高体連) 佐藤光由 (ミヤマ)
外 部 監 査 役	永田智彦 (永田会計事務所)
監 事	田島 等 (独峰) 荒木輝夫 (日本山岳会)
理 事 長	佐藤光由 (ミヤマ)
副 理 事 長	高橋守男 (高体連)
総 務 委 員 会	◎小池寛喜 (個人)
編 集 委 員 会	◎岡安茂能 (高体連)
遭 難 対 策 委 員 会	◎町田幸男 (シグマ) ※毛呂憲治 (前橋)
登 山 指 導 委 員 会	◎石橋 修 (独峰) ※对比地 昇 (高体連)
競 技 委 員 会	◎赤松久宇 (太田) ※堀越利通 (登高会) ※新井好司 (高体連) 茂木 稔 (独峰) 岩崎年伸 (高体連) 斉藤 健 (登高会) 柘植 求 (前橋スポーツクライミング協会) 長谷川喜久男 (前橋スポーツクライミング協会)
海 外 登 山 委 員 会	◎小和田和貞 (ミヤマ)
自 然 保 護 委 員 会	◎岡本 隆 (伊勢崎) ※小池寛喜 (個人) ※清水知樹 (高崎)
事 業 委 員 会	◎見城正造 (沼田)
個 人 会 員 委 員 会	◎根岸 仁 (個人) ※山越稔雄 (登高会) 戸村浩三 (個人) 岩井英芳 (個人)
ジュニア委員会	◎金子一実 (前橋) ※小暮文彦 (境) 阿部悦子 (個人)
理 事	萩原孝志 (安中) 石井達幸 (伊勢崎) 阿久津幸弘 (太田) 吉田文江 (桐生) 井田祐一 (高体連) 大和 亨 (境町) 永井伸之 (渋川岳想) 串橋卓馬 (信越化学) 新井邦光 (高崎) 長谷川 勇 (中之条) 橋本 勝 (日本山岳写真協会) 清野啓介 (沼田) 野口勝広 (松井田) 中島正二 (水上) 高木 均 (あずま体推協) 山本泰司 (アイスエクストリーム) 菅野 徹 (高経大山岳部&OB会) 根井康雄 (日本山岳会) 中島健太郎 (SUBARU体育文化会山岳部) 藤沼隆男 (大間々) 堀越利通 (登高会) 長谷川喜久男 (前橋スポーツクライミング協会) 毛呂憲治 (前橋)
事 務 局 長	小池寛喜 (個人)

◎常任理事・委員長 ※副委員長

令和2年度 群馬県山岳連盟顧問・参与・評議員名簿

顧 問	中曾根弘文 (参議院議員) 羽野順一 (境) 八木原罔明 (ミヤマ)
参 与	小林次郎 (登高会) 石井謙一郎 (伊勢崎) 中原正喜 (ミヤマ) 月岡武久 (星稜) 吉田茂作 (元事務局長) 太田忠行 (独峰) 加藤藤夫 (SUBARU体育文化会山岳部) 悴田正也 (高体連) 牛久保 拓 (伊勢崎) 村上泰賢 (倉淵) 竹山繁男 (独峰) 松永幸雄 (沼田) 長谷川 勇 (中之条) 齋藤長作 (松井田) 小泉俊夫 (前橋) 角田二三男 (高体連) 女屋等志 (ミヤマ)
評 議 員	齐田正博 (伊勢崎) 堀田秀一 (伊勢崎) 吉田 孝 (太田) 三田治宣 (太田) 前原 勉 (大間々) 千明邦彦 (大間々) 佐藤 緑 (桐生) 吉田秀樹 (桐生) 金井昭男 (独峰) 弥野光一 (ミヤマ) 千木良一郎 (ミヤマ) 手島直樹 (高体連) 井上貴智 (高体連) 後藤文明 (境) 宇野貴雄 (信越化学) 小内 諭 (信越化学) 佐竹幸子 (高崎) 湯浅賢一 (高崎) 剣持英司 (中之条) 関 仙治郎 (中之条) 小暮文彦 (境) 松本洋一 (松井田) 浅岡利栄 (松井田) 小野宏和 (水上) 阿部 正 (水上) 町田雅美 (シグマ) 須藤芳行 (あずま体推協) 細井光博 (あずま体推協) 和泉晋也 (高経大山岳部&OB会) 寺内正明 (日本山岳会) 鈴木良徳 (日本山岳会) 田島 等 (独峰) 緑埜公一 (日本山岳写真協会) 黒田 豊 (日本山岳写真協会) 斎藤 健 (登高会)

小林二三雄先生を

偲んで

松井田山岳会副会長

河野 英一

*山岳保険は必携登山装備です



妙義山の魅力紹介講座講演 (2019.1.19)

ぐ横を流れる利根川の水をバケツ
でくみ上げ温度を下げて入浴した
ことが良い思い出です。
今ではダムの水の下です。
翌日からは全員が腰まで水につ
かり利根川の遡上です。
登山初心者の生徒を十二名も
連れて、夏でも十二度程度しか
ない利根川源流登山を四泊五日

で実施した先生は大変
だったと思います。
翌年は水長沢を遡行し
平ヶ岳にも連れて行って
いただきました。登山途
中でも冗談で笑わせてい
ただいたり、多くの経験
から深く貴重な知識を教
えていただけたことに感
謝しています。

高校一年生
の夏休みには
五日間をかけ
て、部員十二
名と先生で利
根川源流の大
利根岳、丹後
山への合宿に
行きました。
合宿の初日は
八木沢ダムの
建設工事を横
目に見ながら
利根川沿いを

私が、小林先生と出会ったのは
高校の山岳部に入部した時でし
た。
山岳部の顧問が小林先生でし
た。先生の第一印象は冗談が好
きで、面白い先生だなというも
のでした。

歩き、奈良沢に掛かったモッ
コ渡しを一人一人渡りました。
水長沢出合いの小屋に一泊
する行程です。当時はまだダ
ムが工事中で、利根川を歩け
たことや、途中で立ち寄った
湯ノ花温泉がとても熱く、す



利根川源流の雪渓

小林先生の登山経
験の中には悔しいこ
ともあったと思いま
す。その一つに中之
条山岳会の松井氏が、
ダウラギリ遠征登山
中に高山病で亡く
なったこともあげら
れると思います。数
年後に行われた松井
氏の慰霊登山はネ
パールで行われ、多
くの岳連の方々が参加されま
した。私も先生と共に参加さ
せていただきました。先生と
私の二人だけでカトマンズの
町に出かけ、スワーヤンブ
ナートと言う寺院に向かいま
した。先生は多くは語りませ
んでしたが、そこで松井氏を
供養していただいたのだと思



矢木沢ダムに水没した湯ノ花温泉

います。私は寺院の周囲に張り巡
らせたマニグルマを廻して祈りま
した。
近年では、小林先生から裏妙義、
星穴沢近くの金洞沢で、黒色の岩
の中に緑色を含んだ岩を探す依頼
を受けました。
先生は日本地質学会会員で、地
質の研究に熱心に取り組んでおら

れました。

二〇一九年五月三十日、私は岳友と三人で金洞沢を調査しました。沢は黒色の地層が流れ下った様に帯状に連なっていました。比較的柔らかい岩石の一部とガレ場の岩の中に、直径十五センチメートル程の光輝く丸いガラス質の岩を発見し持ち帰りました。待っていた小林先生によると、蛇紋岩とカンラン石であると言っていました。

更に調査を進めるために、同年六月九日に、小林先生と長男の伸一さんと私の三名で調査に出かけましたが、カンラン石は発見できませんでした。

伸一さんは三十キログラム、四十キログラム程の大きな蛇紋岩を背負子に背負い、先生に誕生日プレゼントだと言い、渡していました。妙義山が火山である貴重な資料を手にお亡くなりになったのは、心残りだったと思います。

小林先生と出会って五十七年間、長きに渡り大変お世話になりました。思い出は数知れずありますが、もつと色々の話をしたかったと思っています。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

五輪延期。心をひとつに

群馬県山岳連盟顧問

八木原 窓 明

天が人間に、人類に罰を下そうとしているのか、私共を試そうとしているのか？と思えるほどの世界の大災厄、大騒動となりました。私共には何時になったら収束、終息するのか想像もつきません。専門家の判断を信じ、判断に任せ、もう少し不自由に耐え、辛抱するしか無いようです。

本年三月二十四日(火) 日本時間の夜九時から国際スポーツクライミング連盟(IFSC)が世界中の全加盟団体と電話会議を開催するとの通知があり、私共日本山岳・スポーツクライミング協会の三役他が事務局に待機しておりました。

ところがその二日前の二十二日(日) 夜九時過ぎ、バツハイOC会長からの要請による森喜朗組織委員長との緊急電話会議が始まる。バツハイ会長は「新型コロナの世界的な感染拡大を受けて、延期を議論しないわけに

はいかない」と本年夏に迫った東京オリンピックの延期を四週間以内に「延期を含む複数のシナリオ」を検討したいと告げる。二十三日夜には安倍首相とバツハイ会談が決まる。

IOCも日本側も「延期するしかない」との腹積もりは既できていた。しかし自分から言い出すわけにはいかない。言い出さずべ側に財政負担がかかる恐れがあるからである。

すでにIOC最古参事員やJOC理事から「延期へのアドバンス」は上がっている上にトランプ発言やアメリカの水泳・陸上という花形競技連盟が各国・地域の意見を集めたうえで延期を希望する事態の出来レースを見るにつけ私共は「決まった」と受けとめました。止めは「本日二十四日(火) 夜八時から安倍首相とバツハイ会長が電話会談する」のニュースでした。

我々のIFSC電話会議の一時間前にオリンピック開催を延期するか否かの最高決裁をするトップ会談である。「会談前に延期は決定済み。後は半年か一年か二年か？」の時期の決定だけであろうと推察された。

首相の「一年程度の延長」記者会見とマルコIFSC会長の語りかけはほぼ同時であった。来年のほぼ同時期の夏開催が決まる。ホツとしたような、ガツカリしたような複雑な気持ちではあったが宙ぶらりんよりは良い決定でした。

翌日の野口啓代、榎崎智垂選手はじめスポーツクライミング選手のコメントは立派でした。本当に良かったと思います。私どもは一日も早い収束へのできる限りの協力をするしかありません。コロナに負けるわけにはいきません。共に進みましょう。
(二〇二〇年四月二十九日(水))

山麓逍遙 (編集後記)

W・ウエストンの登山とそれを支えた清蔵との心の交流を書いた「登山家W・ウエストンと清蔵」(みやま文庫)のまえがきで、小林三雄先生は、ウエストンがその著作の中に、共鳴していた博物学者C・ゲスナーが「神が私に命を授ける限り、毎年二、三の山、いや、少なくとも一年に一回は必ず山に登る」との誓いを立て、さらに「怠け者、贅沢者、癩癩持ちではなく、心身ともにそその均整がとれた人間であればよい。その人間を連れ出して、自然を観察し、神に順ずる人間に仕立てたいものだ。山間に多なるものが一纏めに示されているのを見て感じ、巨匠が創られた奇跡に触れることにより、心に喜びが加わって五官のすべての調和がとれるのだ。これ程気高く、これ程尊く、またどの面からみてもこれ程完全な世界の中に、人間はどのような喜びを見出すことができるのか、私はいつも問うている。」と言っていたことを紹介されている。また、W・ウエストンが日本山岳会の登山者たちに宛てた短文の中で、「男たちよ、急ぎ来りて、この岬々たる山を登れ。その気高い労苦で得られる糧(かて)は、名譽と休息である」という登山家D・フレシュフィールドの言葉を引用したことをとりあげられた。ウエストンが「宗教人として、神に尽くす畏敬の念が、そのまま多くの山岳の登高にあつたとも考えられる」と解説された。これは他ならぬ小林先生のメッセージでもあろう。
(岡安茂能記)



株式会社エーアールアイ
東京都練馬区上石神井 3-18-1
TEL 03-5991-4638

弱電工事承ります。
電話工事、ネットワーク工事及びセットアップ(LAN 及び Wi-Fi 環境)、
TV アンテナ及びケーブル工事
パソコンで悩んでいませんか?
ソフトの使い方はわかりませんが、ハードの悩みは相談してください。
(難しい故障の場合は外注となります。)

ミヤマネットワーク

代表 佐藤光由
群馬県前橋市高花台 1-6-5
電話 027-269-1143 携帯 090-8842-2158



(有) 山とスキーの店 石 井

DreamBOX

伊勢崎市宮子町 3448-2
TEL 0270-21-8025 FAX 0270-21-8026